

芥川の習作作品に見ゆる

白秋の投影について

久野 アツ子

一
僕等の散文が詩人たちの恩を蒙つたのは更に近い時代にもない訳ではない。ではそれは何かと云へば、北原白秋氏の散文である。僕等の散文に近代的な色彩や句を与えたものは詩集『思ひ出』の序文だつた。（『文芸的な、余りに文芸的な』）

芥川竜之助は、最晩年のエッセイの中で初期白秋に讃辞を送っているが、果して習作期と目される時期の芥川作品には、当時の耽美主義的志向の文学——殊に前掲の言を裏書する如く、その派の代表的詩人北原白秋の投影が著しい。既に短歌においては、木俣修、吉田精一、中村真一郎の諸氏が数首をそれと指摘された。然し芥川自身の記述にもある如く散文にも又見捨て難い白秋の影を発見する。芥川の文学母胎について村松定孝氏は、「耽美主義的浪漫主義」をその条件の一に挙げられているが、その一環と見るべき白秋の投影は一顧に価するものと思われる。而してこの期の芥川作品に実証的に白秋の影を指摘する事を試みた後、芥川の白秋に受けた影響についての一私見を述べて見ようと思ふ。

二 芥川における白秋の投影

1

『大川の水』と『思ひ出』の序

明治四十五年一月、小品『大川の水』が書かれた。この小品は東京人芥川の、云わば心の故郷大川端と感受性鋭い幼少年時に対する浪漫的な「思慕と追憶の書」とでも云うべき作品である。佐々木信綱はこの『大川の水』に初めて「芥川君を知り、ことに芥川君の文章を知つた」と述べられている由である。さて『大川の水』に大川の流れを叙する美しい、修辭に満ちた、次のような文章がある。

吾妻橋、厩橋、両国橋の間、香油のやうな青い水が、大きな橋臺の花崗石と煉瓦とをひたしてゆくうれしさは云ふ迄もない。岸に近く、船宿の白い行燈をうつし、銀の葉うらを翻す柳をうつし、又水門にせかれては三味線の音のぬるむ昼すぎを、紅芙蓉の花になげきながら、氣のよいわい家鴨の羽にみだされて、人氣のない厨の下を静に光りながら流れるのも、其重々しい水の色に云ふ可らざる温情を蔵してゐる。

しかしながらこれは、芥川による囑目のスケッチではない。これには更に先行する白秋の文章があつた。この時より約八カ月前、四十四年五月に刊行された詩集『思ひ出』の序「わが生ひたち」中の一文がそれである。

水は清らかに流れて廢市に人り、廢れはてたNOSKAIノスカイ屋（遊女屋）の人もなき厨の下を流れ、洗濯女の白い酒

布に注ぎ、水門に堰かれては、三味線の音の緩む昼すぎを小料理屋の黒いダリアの花に歎き、酒造る水となり、汲水場に立つ湯上りの素肌しなやかな肺病娘の唇を噉ぎ、気の弱い鶯の毛に擾され、さうして夜は観音講のなつかしい提燈の灯をちらつかせながら、樋を隔て、海近き沖ノ端の鹹川に落ちてゆく。

白秋は郷里柳河の溝渠の水の流れを、このように「わが生ひたち」に叙していたのであつた。『大川の水』中の芥川の文章が、白秋のこの文章の全き模倣である事は一目瞭然である。即ち芥川は白秋の、柳河溝渠の水の⑥「観音講のなつかしい提燈の灯をちらつかせながら」を①「船宿の白い行燈をうつし」と表現を改め、②「水門に堰かれては、三味線の音の緩む昼すぎを」を②「水門にせかれては三味線の音のゆるむ昼すぎを」と用字を変えてその儘移植し③「黒いダリアの花に歎き」を③「紅芙蓉の花に歎きながら」と花を改め④「気の弱い鶯の毛に擾され」を④「気の弱い家鴨の羽にみだされ」とし、⑤「人もなき厨の下を流れ」を⑤「人氣のない厨の下を静かに光りながら流れるのも」と、或は修辭を加え或は節を削除し前後しつゝ、大川の流れの描写を換えたのである。『大川の水』と「わが生ひたち」には、こゝを一致の頂点として幾多の類似的箇所が散見せられる。

三段落より成る『大川の水』の二章とも云う可き才二の段

落は、次のような地理的具体性をもつた叙述で發展する。

此大川の水に撫愛される沿岸の町々は、皆自分にとつて、忘れ難い、なつかしい町である。吾妻橋から川下ならば、駒形、並木、蔵前、代地、柳橋、或は多田の薬師前、うめ堀、横網の川岸―何処でもよい。是等の町々を通る人の耳には、目をうけた土蔵の白壁と白壁との間から、(略)磨いた硝子板のやうに、青く光る大川の水は、其冷な潮の匂と共に、昔ながら南へ流れる、懐しいひびきをつたへてくれるだらう。

この冒頭の文の運びは「わが生ひたち」の同じく二章と云うべき「2」の冒頭の文の運びに酷似している。それは次の文である。

私の郷里柳河は水郷である。さうして静かな廢市の一つである。自然の風物は如何にも南国的であるが、既に柳河の街を貫通する数知れぬ溝渠のほひには日に廃れゆく旧い封建時代の白壁が今なほ懐しい影を映す。肥後路より、或は久留米路より、或は佐賀より筑後川の流を越えて、わが街に入り来る旅びとはその周囲の太平野に分歧して、遠く近く瓊銀の光を放つてゐる幾多の人工的河水を眼にするであらう。

即ち芥川の①沿岸の町の説明。②地名の列挙、③④才三者を設定しての推量文、と云う文の運びは白秋の④⑤⑥⑦のそれと同じである。大川端を叙せうとする芥川の脳裡に

は、白秋のこのニュアンスに富んだ「……水郷である」「……影を映す」「……眼にするであらう」と云う種々の終止を以つて運ばれる、リズムカルな文の余韻があつたのではあるまいか。

『大川の水』の序的性格を持つオ一段落の一文と、「わが生ひたち」の等しく序と云うべき「1」の一文に又二三の類似性を感じられる。即ち芥川の幼少時の追憶の表現は、著しく白秋の表現に近似しているのが感じられる。酷似した比喩、白秋の詩文に頻出する「をののく」の動詞、素材の使用、各官能を交錯せしめた感覚的表現、殊に色彩語の使用が著しい。綜じて『大川の水』には、構成的に一部、表現技法の上に著しく『思ひ出』の序「わが生ひたち」の反映が認められる。猶又両者には一種の「追懷文学」と云う性格の一致も認められる。

2 『桐の花』と「秋」その他

明治四十三年四月の書簡に次の歌がある。

① 川やなぎ薄紫にたそがるる汝の家を思ひかなしむ

② ヒヤシンス白くかほれり窓掛のかげに汝をなつかしむ
夕

③ 夕潮に春の灯うつる川ぞひの汝の家のしたはしきかな
この三首には『桐の花』の影がある。白秋は四年五月「スバル」誌上に、それに『桐の花』の新風は成るとされた「もののあはれ」六三首を発表していたが、それには次のよう

な歌がある。

④ 猫やなぎ薄紫に光りつゝ暮れゆく人はしづかにあ
ゆむ

⑤ ヒヤシンス薄紫に咲きにけりはじめて心顫ひそめ
し日

⑥ 春の鳥な鳴きそ鳴きそあかかと外の面の草に日の
入る夕

恐らくこの時の芥川は、これら白秋の歌に接していたものと思われる。オ一に「川やなぎ薄紫にたそがるる」「ヒヤシンス白くかほれり」と云う、色と匂ひとを交錯せしめた感覚的表現である。これは明らかに『桐の花』の個性であつた。芥川の脳裡には例えば④や⑤の歌の戦くような新感覚の感激が刻鏤されていたのではあるまいか。「薄紫」の色彩語は既に④⑤に見える如く屢々白秋の詩歌に見出され、又短歌にヒヤシンスを初め西洋草花を取り入れたのも「桐の花」の個性であつた。更に①のリズム、気分、用語は④のそれに酷似し、②の二句切のリズムは⑥のリズムに同じと云得る。余情の揺曳をうながす「汝をなつかしむ夕」の「夕」の名詞止は、後歌集『桐の花』の巻頭を飾る⑦の歌において、極めて印象深く歌われていたのである。③、恐らくこれが芥川の地の歌であらう。歌意としては三首とも、こんな夕暮には君が懐しい、と云う程のものである。それが①②の歌ではその背景を叙するに誠実な現実の写実はと

られず、『桐の花』の感覺情調で染められて了つたと見得ようと思う。

大正二年一月、『桐の花』が刊行されたがこの年の芥川の書簡には、その並流たるの何者でもない短歌の数首が見出される。三四信中に「秋」一連の歌もそれである。

⑩ 埃及の青き陶器の百合模様秋はつめたくひかりそめける。

⑫ 秋風は清国名産甘栗とかきたる紅き提灯にふく

⑪ 鍔銀の蠅取蜘蛛をまづ活かし秋はさやかに光りそめぬる
(桐の花歌)

⑦ ちりからと硝子間屋の燈籠の塵埃うごかし秋風の吹く
(桐の花歌)

⑩は⑨の換骨、又⑫も⑦の換骨と見得ようと思う。三五信「秋の歌」一連。その一首、

⑭ 秋風よユダヤ生れの年おいし宝石商もなみだするらむ

①いと憎き宝石商の店を出で泣かむとすれば雪ふりしきる
(桐の花歌)

⑭の宝石商と云う個性的な素材であるが、この素材は一例は⑩に見えるが、白秋の套語と云わねばならない。又野田宇太郎氏は白秋や奎太郎を「新時代の詩人として価値づけたものは(略)思ひ切つた斬新な詩的感覚として発見されたボキヤブラリーの新しい発掘であつた」と述べられ、そ

れに「阿蘭陀」「羅馬人」等々を挙げられているが、「ユダヤ」は正しくその系統に属し、何か西洋的感覚の「宝石商」のボキヤブラリーも、白秋等により発掘された新素材の一であらうと思われる。

芥川の短歌は、その端緒を明治四十三年の書簡中に、以後『紫天鵲絨』『客中恋』、『若人』の作品―大正二年から三年の作品を頂点に、白秋の『桐の花』の短歌精神を著しく反映させているのが認められる。即木俣氏が述べられた如く感覺情緒、リズム、一語一句の末まで及んで『桐の花』の模倣歴然たる事が認められるのである。

3 『老年』の一文と「雪」

処女小説『老年』は大正三年四月、才三次「新思潮」に発表された。東大英文科一年の時の作品である。吉田精一氏はこの作品の追憶に生きる詩情と雪の日の大川端情緒は、共に頽唐派の好んで眼目としたものであると述べ、頽唐派文学の余響を指摘された。『老年』に「カ所、小止みなく雪の降る戸外の叙述がとられている。

長い廊下の一方は硝子障子で、庭の刀柏や高野槇につもつた雪がうす青く暮れた間から、暗い大川の流れをへだて、対岸のともしびが黄いろく点点と数へられる。川の空をちりちりと銀の銕をつかふやうに、二声ほど千鳥が鳴いたあとは、三味線の声さへ聞えず戸外も内外もしんとつた。きこえるのは、藪柑子の紅い実をうづめる

雪の音、雪の上にふる雪の音、八つ手の葉をすべる雪の音が、ミシン針のひびくやうにかすかな囁きをかはすばかり、話し声は其中をしのびやかにつゞくのである。

この二つの感覚的な比喻を含む、詩的ムードの強い文章には、白秋の影があると思うのであるが、具体的なそれとしては『東京景物詩』中の「雪」である。即、「雪」の詩が持つ雪のつむ夜のしめやかな情景と時間の経過が、この一文に生かされているように思われる。傍線を施した比喻表現は正しく「雪」の、「幽かな囁き……幽かなミシンの針の／薄い紫の生絹を縫うて刻むやうな」の表現を、変形復活させたものと思われる。「ちりちりと銀の鍔をつかふやうに」の表現も、白秋に派生した表現と推察される。中村氏は、芥川は「実に純粹に意味を伝達するだけの、論理的で主観を殺した文章は一行も書いたことはなかった。常にその文章は詩的世界を背後にもっている」と述べられているが、それは『老年』の文章に云い得る事であり、『老年』における芥川には、その詩的雰囲気のための素材や技巧を白秋の文学に負っているのが認められるのである。

三 結 び

千八百九十年代は僕の信ずる所によれば、最も芸術的な時代だった。僕も亦千八百九十年代の芸術的雰囲気の中に人となった。かう云ふ少時の影響は容易に脱却出来るものではない。僕は近頃年をとるにつれ、しみじみこの

事実を感じている。

芥川竜之助の文学的青春を培った、「最も芸術的な時代」における文学の一に、私は北原白秋の文学が数えられねばならぬと思っている。それは短歌のみにおいてではない。又短歌にしても、それは単なる短歌枠内の問題として全く散文とは没交渉に処理さるべきものではないであろう。

それでは、習作時に著しい白秋の感化投影は、芥川に如何なる嗜好や影響を残したであろうか、それについての一私見とは未だ微々たる感想に過ぎないけれども、芥川の色彩に対する関心とでも云うべきものは、白秋に負う所が大きいではあるまいか、と云う事である。林健太郎氏は、芥川作品を読んだ後には「いつも何かはつきりした——あるいは強烈な、あるいは清澄な——色彩感が残る」と述べられているが、確かに芥川作品は強烈な或はあざやかな色彩の世界を持つている。そこには光覚色覚を持つ素材や事象物象の配置があるが、注意すべきは色彩による修辭や分析が多見される事である。即ち芥川にとつて色彩は主要な修辭の一となつてゐるらしく思われるが、この手法こそ、色彩の美で表現を修辭する手法こそ、習作時芥川が白秋ばりの色感を駆使し、唯美的な文章を綴つたその名残りではないか。又芥川は「僕には時と場合でとても使えない語があつたり、句の調子が気になつたりするのだから仕方がない。たとへば柳原と云ふ町の名前でも、一面にそこいらが

縁になるやうな気がして、その縁に折合ふやうな外の語がない以上、どうしても使ふ気にはなれない」と述べているが、この色感に敏感で、又創作においても絶えず色彩の配合を考慮する創作態度は、その青年時心酔した、絢爛たる色感の詩人白秋の文学に、或は白秋等の文学に啓発された所もあるのではなからうか。

芥川に対して最も深い影響を及ぼした日本の作家は、漱石と鷗外の二人であるとされている。然し又芥川はこの二人とは異質な作家である事も言及されている。吉田氏はその根本を、夫々が足場とした西洋の健康なそれと、精神の病患と感受性の過多に悩む世紀末の西洋との相違において見られているようである。芥川には漱石鷗外には見られない又一つの唯美的な特質があつた。それには芥川自身の資質にも加えて、その青年時等しく世紀末西洋を足場とし反映させ、日本の文壇に「最も芸術的な時代」を作つた先達耽美主義との関連が必然化して来る事にならう。村松定孝氏は、芥川の形式美を重んずる芸術至上主義の源泉と、後年キリシタンに取材した南蛮小説の萌芽とを、この風潮に置こうとされている。芥川と白秋、又芥川と耽美主義文学との間には、二三の氏の啓蒙はなされているが、猶かえりみるべき問題があるように思われる。

(三十三年度卒業)

「みだれ髪」の

表現法に関する一考察

―量用反復の効果による「みだれ髪」の特性―

下 村 裕 子

序

「みだれ髪」の作品価値については当時から激しい賛否両論(註)があるが、表記上の観点からその何れをとるべきかは自ずからこの小論が明かにするだらう。要するに「みだれ髪」が当時の文壇を風靡する地位を得たと云う事は、やはり「みだれ髪」が当時の人々をして魅せしめ、且つその人々の共鳴を博する何者かを有していた為と云える。そこでその何者かの一部を「みだれ髪」独自の表現上の特異性、特徴的語法、作者の造語などにわたつて考えてみた。ところがそれらを実際に分類してみると予想外に広範囲になる為、その中から最も特徴的な「語句の量用反復」の問題をとりあげ、「みだれ髪」独自の表現法を検討する事にした。歌の番号、解釈、批評等については佐竹簫彦氏著「みだれ髪研究」を底本とした。

註、「みだれ髪」は耳を欽しむる歌集なり。詩に近づきし人の作なり。情熱ある詩人の著なり。唯容態のすこしほのみゆるを憾みとし、沈静の欠けたるを瑕となせど、